

MC による実験住宅 : SH-30

— 文京区・関口台町

設計 広瀬鎌二建築技術研究所

建築文化
1960 - 10

空気調整指導 千野 弘

担当 本吉康郎 内藤 彰

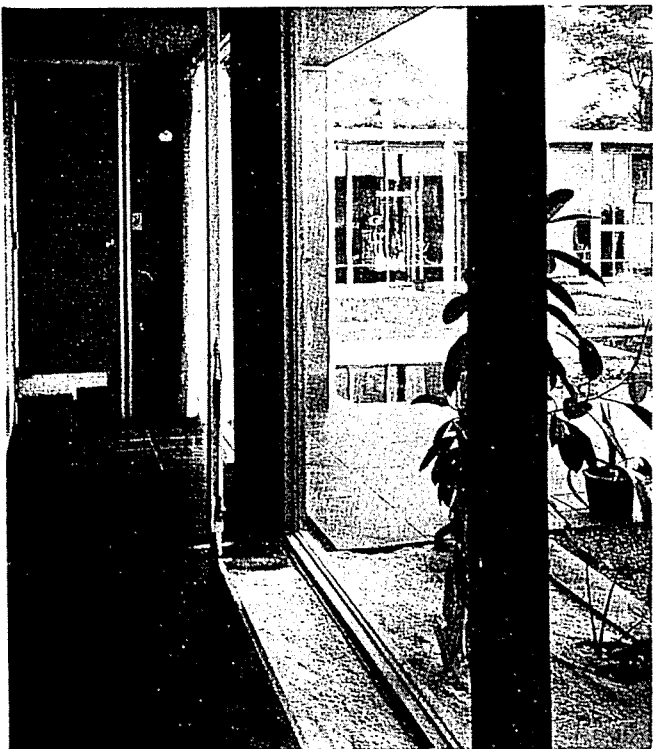
施工 建築 川上土地建物株式会社

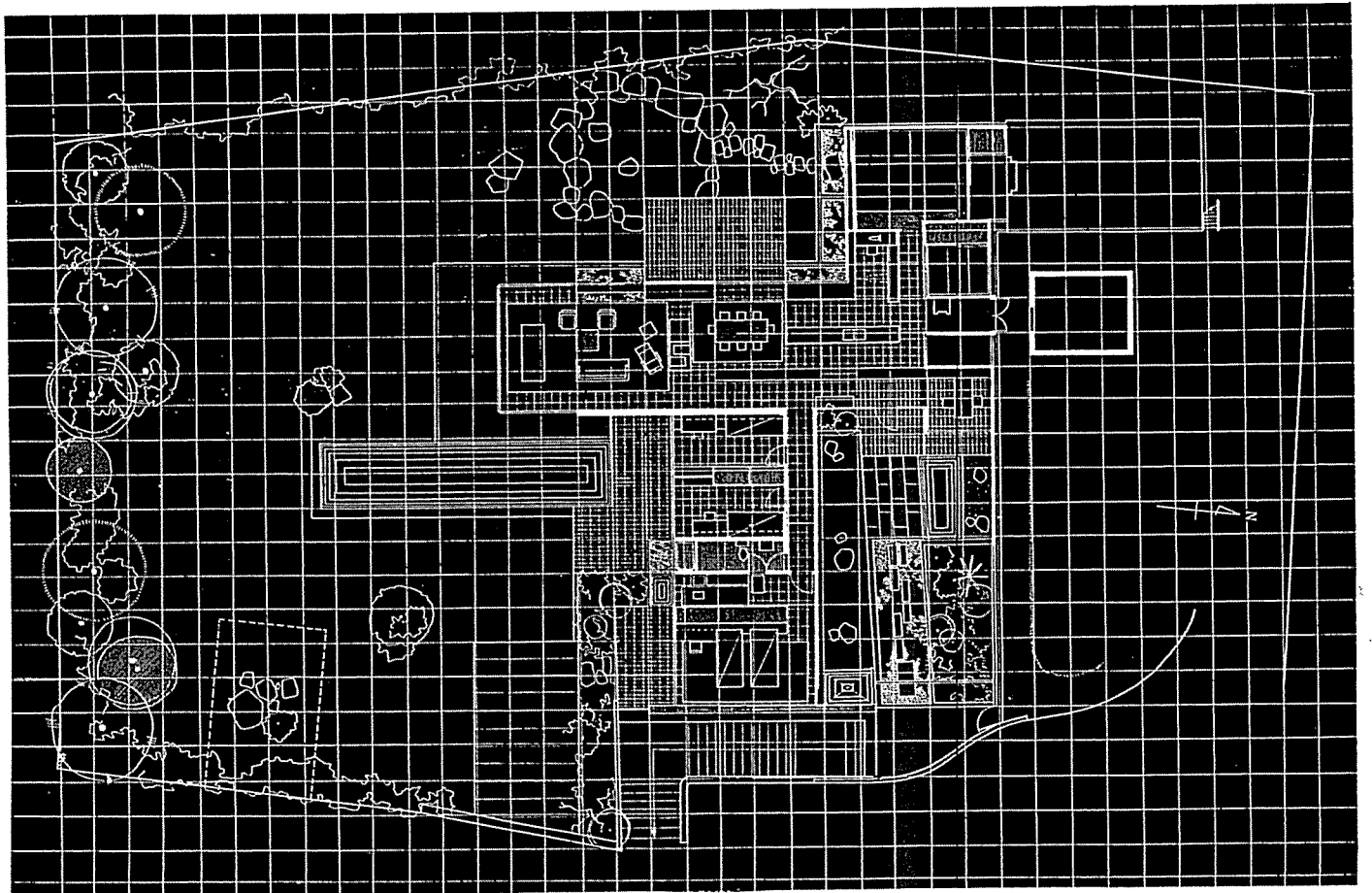
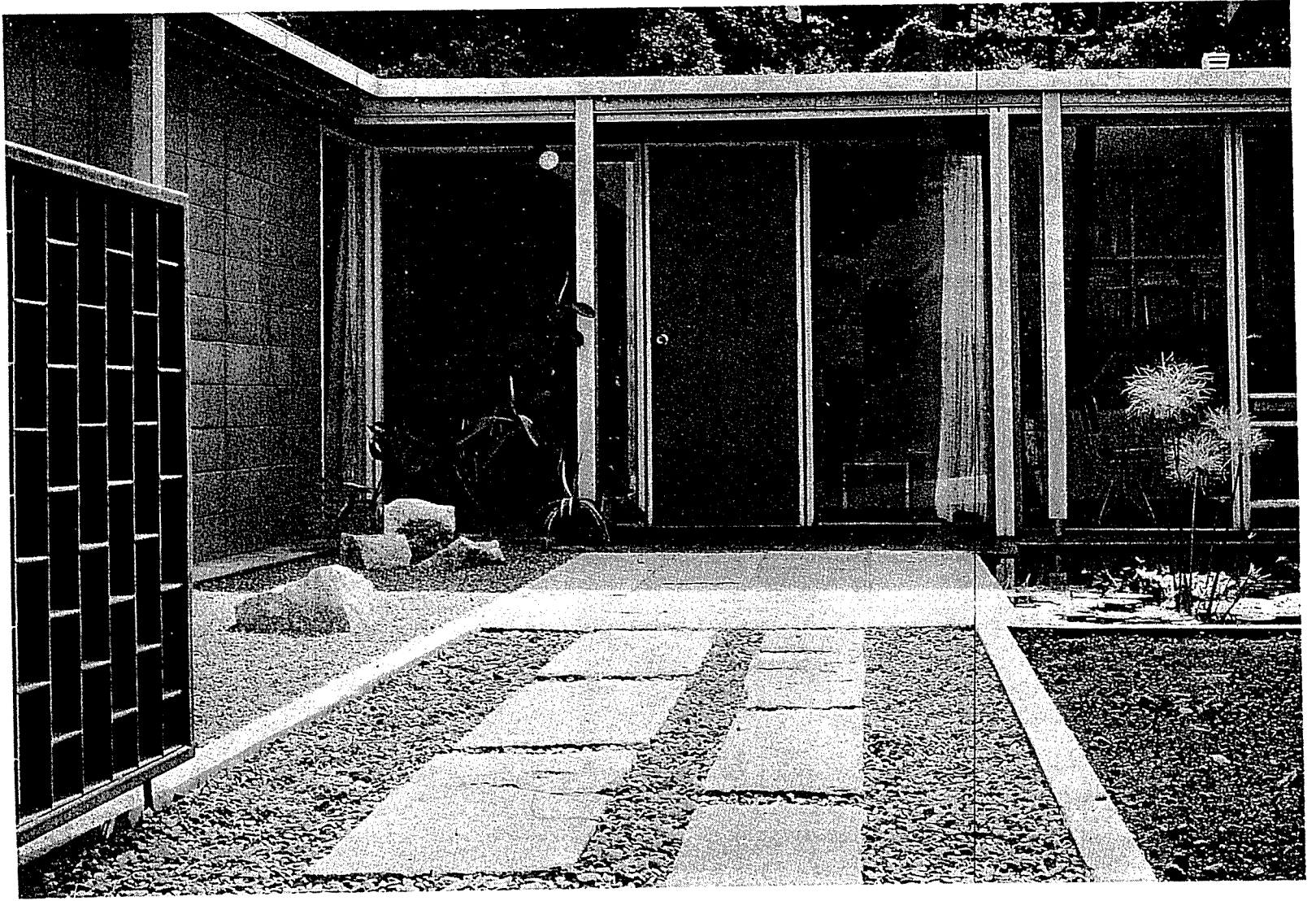
鉄骨 鼎製作所

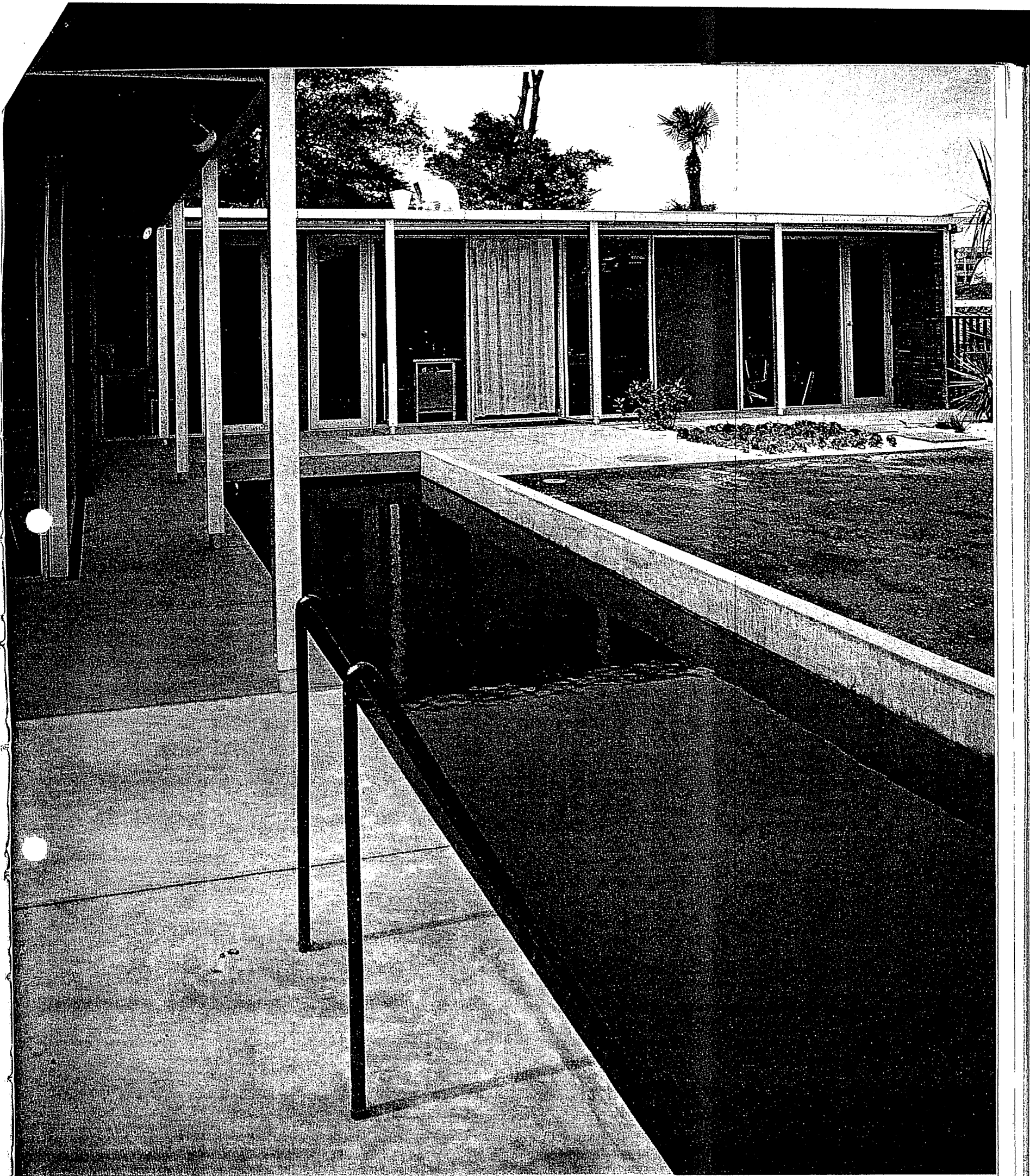
冷暖房衛生 暁建設工業株式会社

電気 大栄電気株式会社

家具 創建社





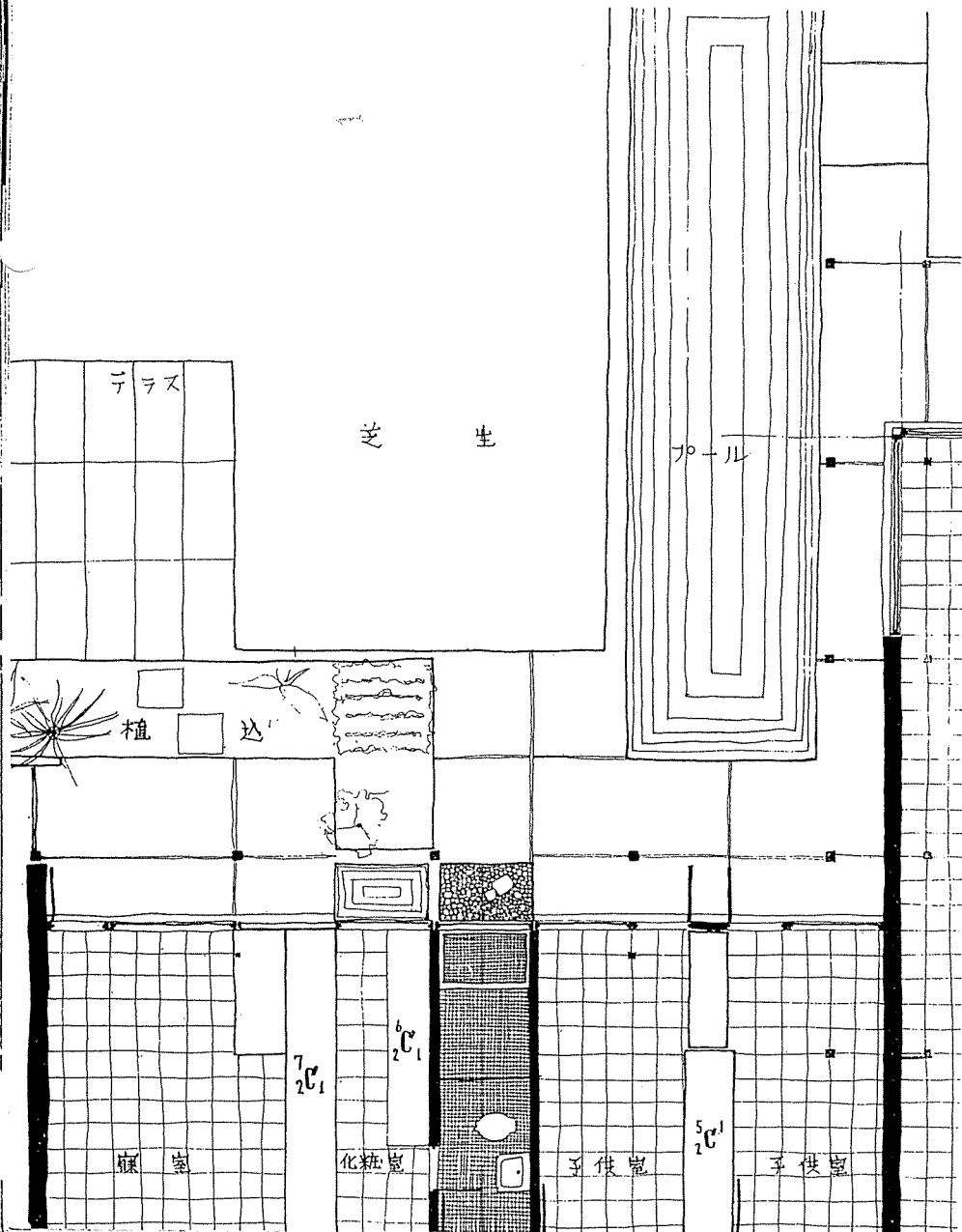
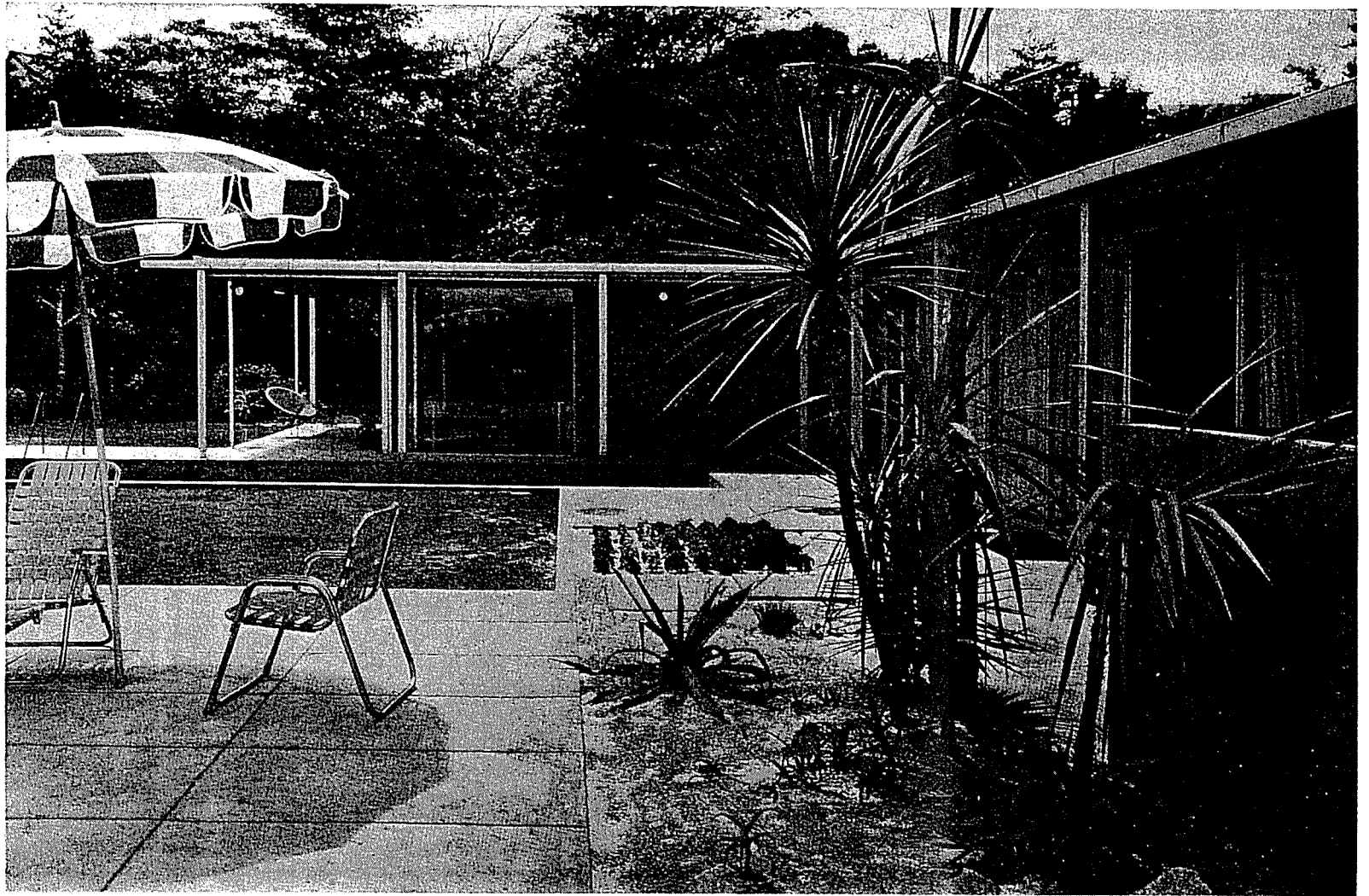


Photos: C. Hirayama

この住宅は、建築の工業化とくに住宅の量産化の前提となっているMC（モジュラーコーディネーション）の実際を実験的にたしかめる目的で計画された。したがって、モジュールの適用に対する目的である部品化を実施するための準備として、その対象に何を選びそれにどんな寸法を与えるかということからはじめている。部品化をそのパネル化とその組合わせに置いたのは、この部分が最も扱い易

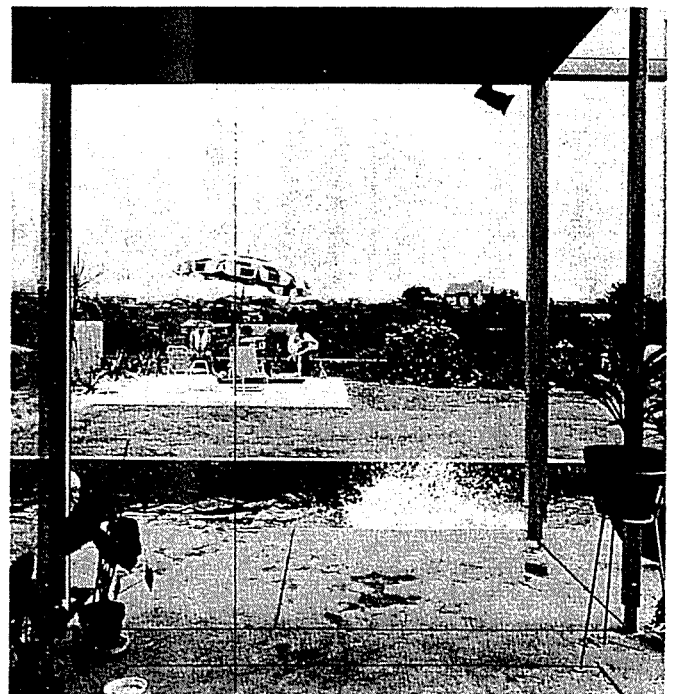
く、かつMCの実験という目的に対して建物の主要な位置を占めているものだけに、その効果を知るのに都合がよいと考えられたからである。

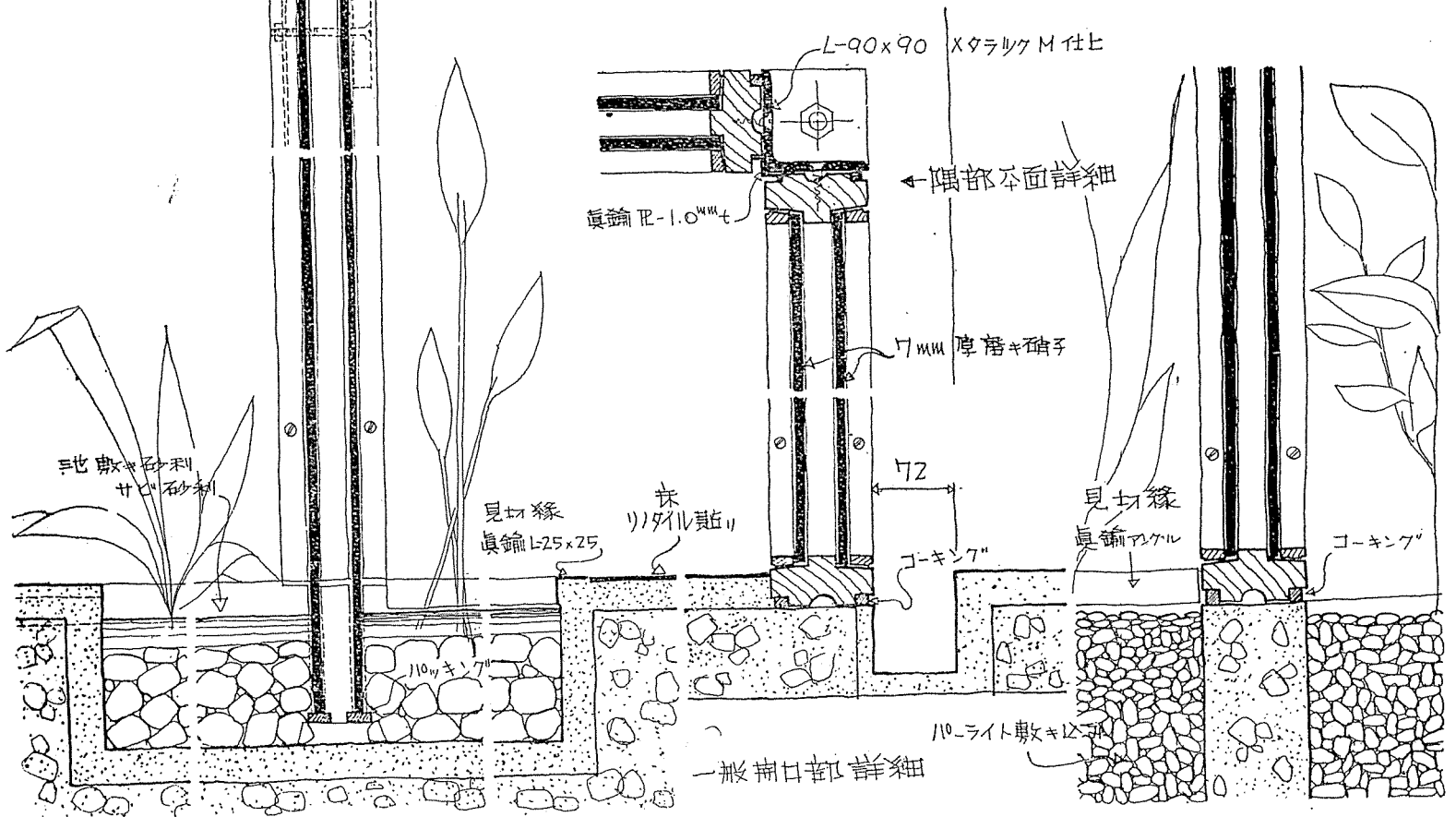
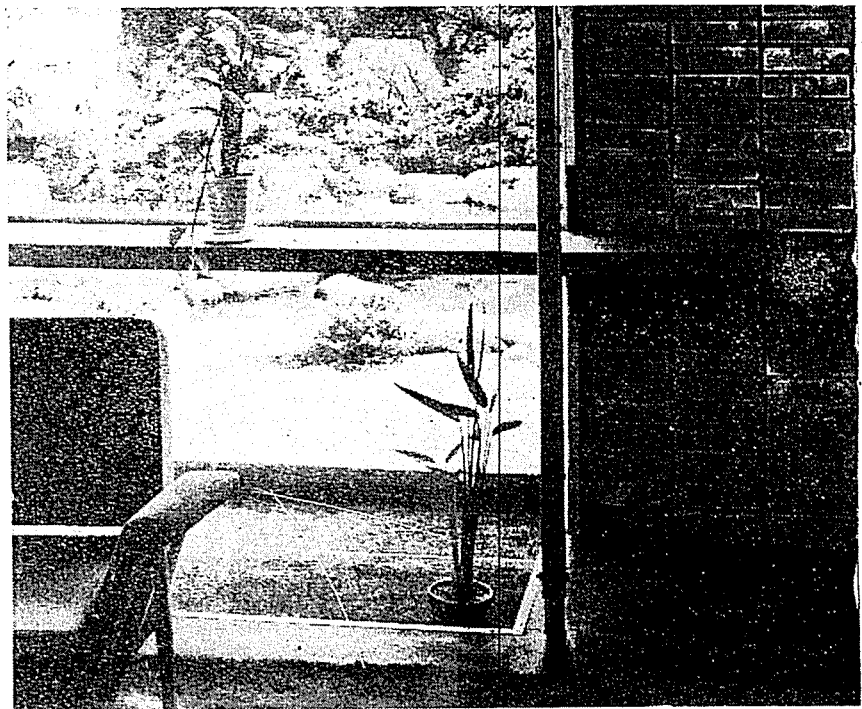
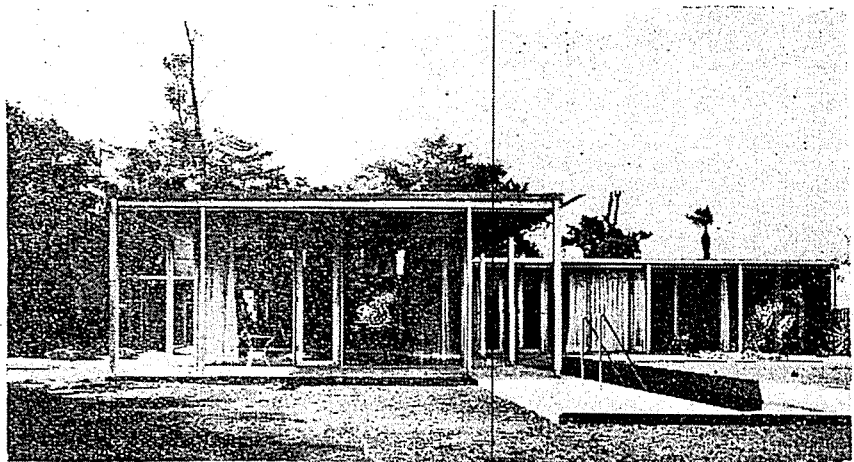
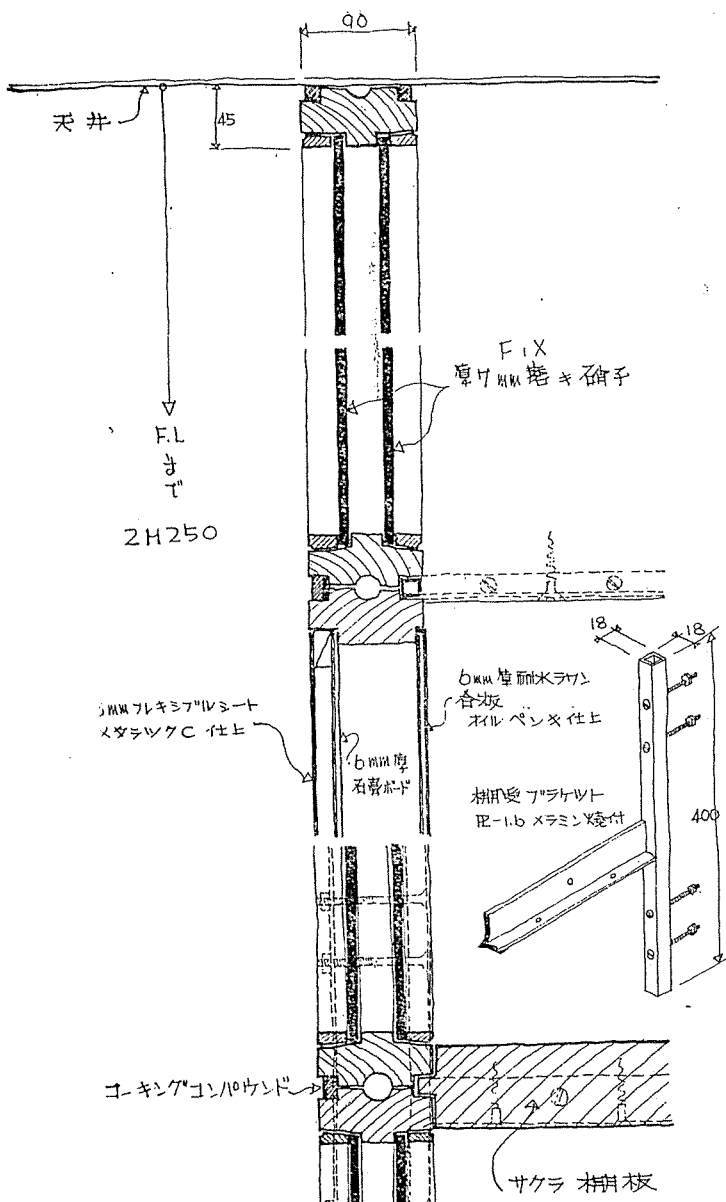
平らな屋根、平らな床という構成のしかたは、MCの効果を適確に容易に得るために役立たせると同時に、空間の拡がりと内外の有機的なつながりを、さらに積極的に表現する手段でもある。

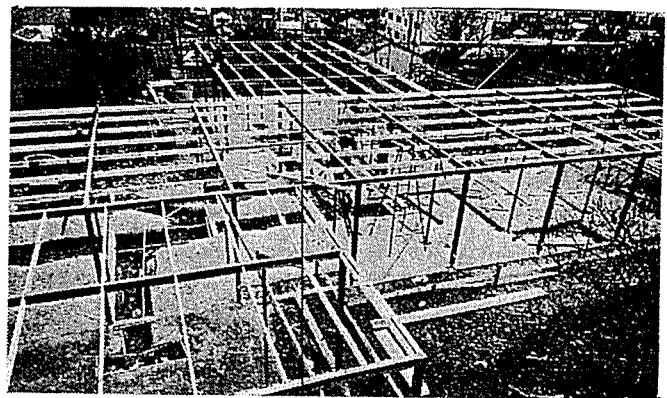
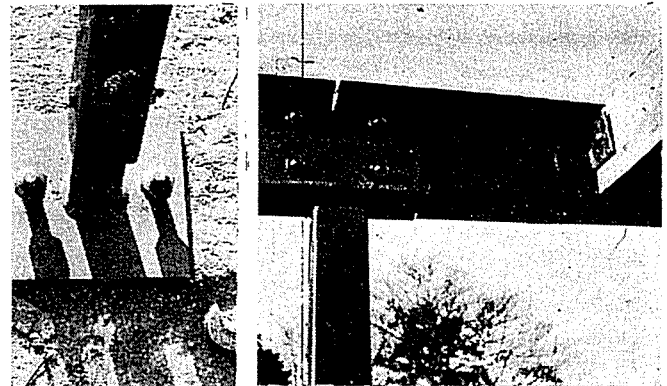
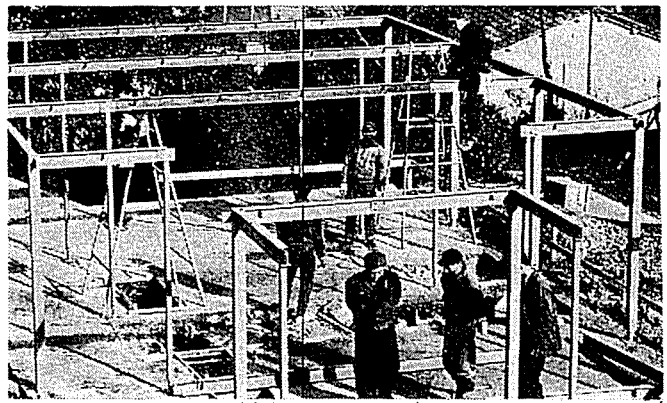
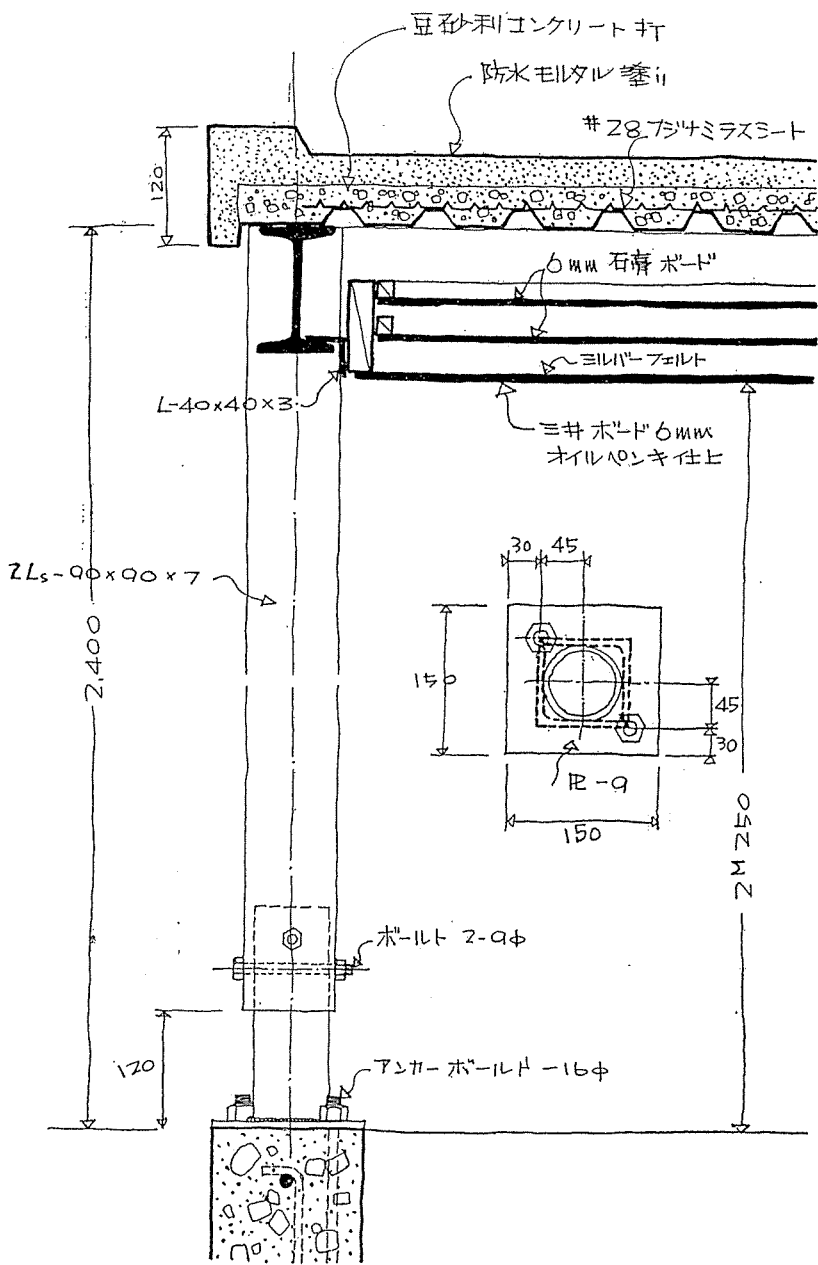
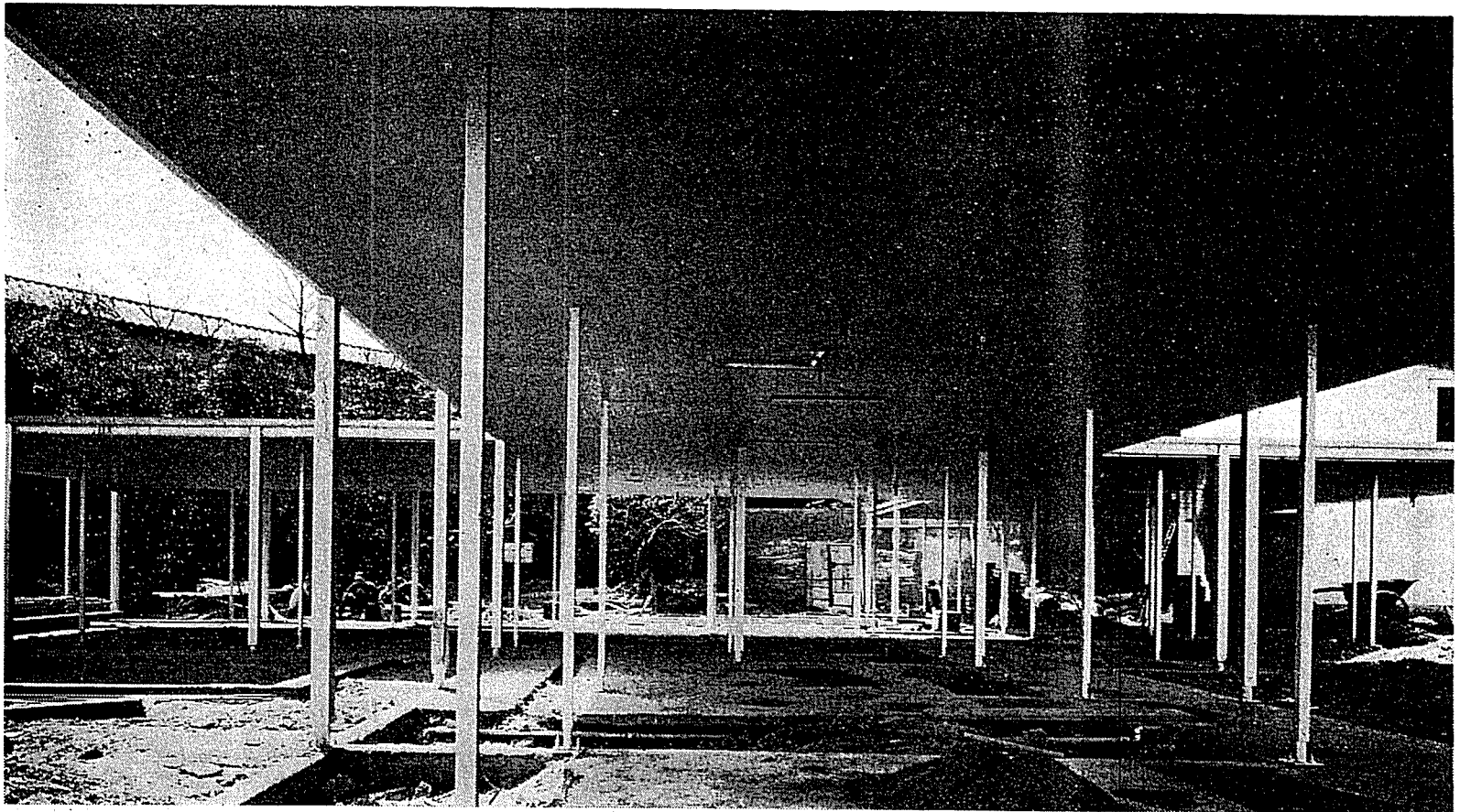


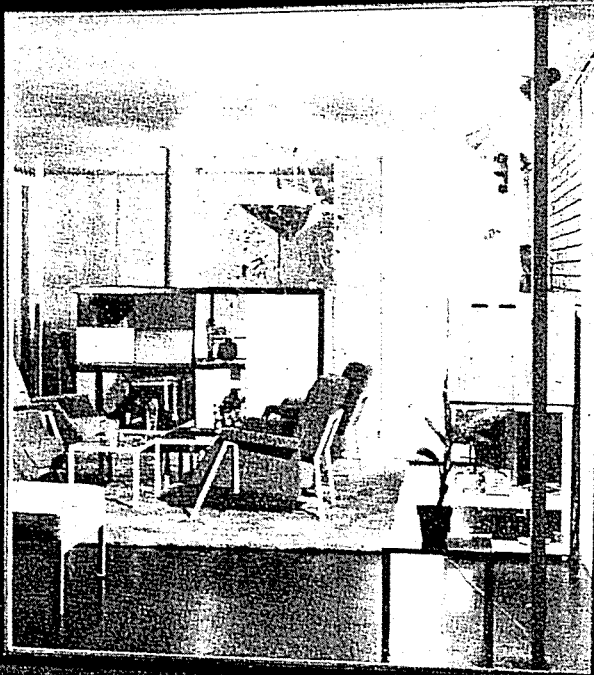
すまいというものが、より機能的に洗練され、生活の機械化が進むと、その必要性からも経済性からも、各室の面積は小さくなり住空間は狭められてゆく傾向がある。

しかしながら、自然に親しもうとする人間の才能は、やはり広々とした空間と、戸外へのつながりを断つことをゆるさない。建物が狭小になればなるほどこの欲求は強くなるにちがいない。この住宅は、都内にはめずらしく自然の環境にめぐまれた、見晴しのよい高台に建てられた。こうして立地条件をできるだけ効果的に生かすために、戸外と室内とを連絡する切れ目のない空間として感じさせること、戸外生活の積極的な利用に計画の重点が置かれている。









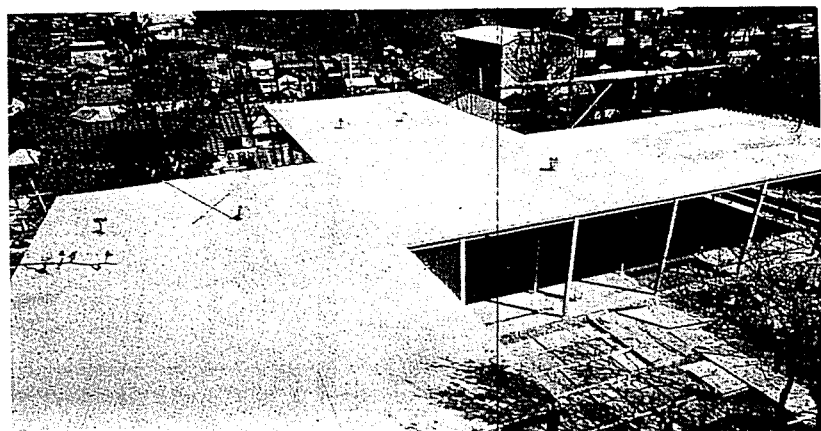
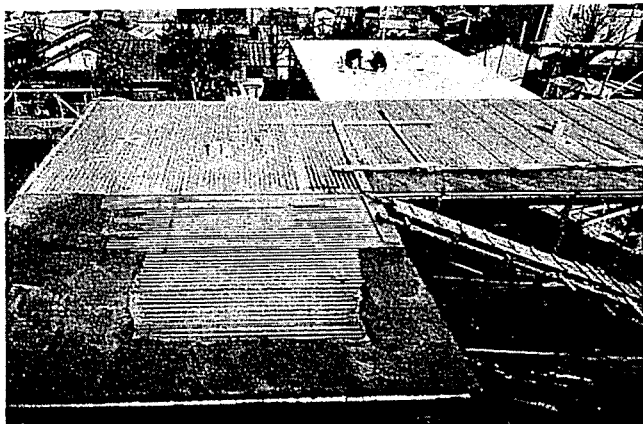
SH-30 の構造は、先に本誌で紹介した“332”型の構造と同じだが、332型が梁と柱を軽量形鋼で計画したのに対し、この建物では熱間圧延鋼を使っている。軽量を熱間に変えたのは、前作よりこのほうが多少工費に余裕があったことと、加工とくに溶接の場合の精度が、軽量では技術的にも確保しにくいと考えたからである。

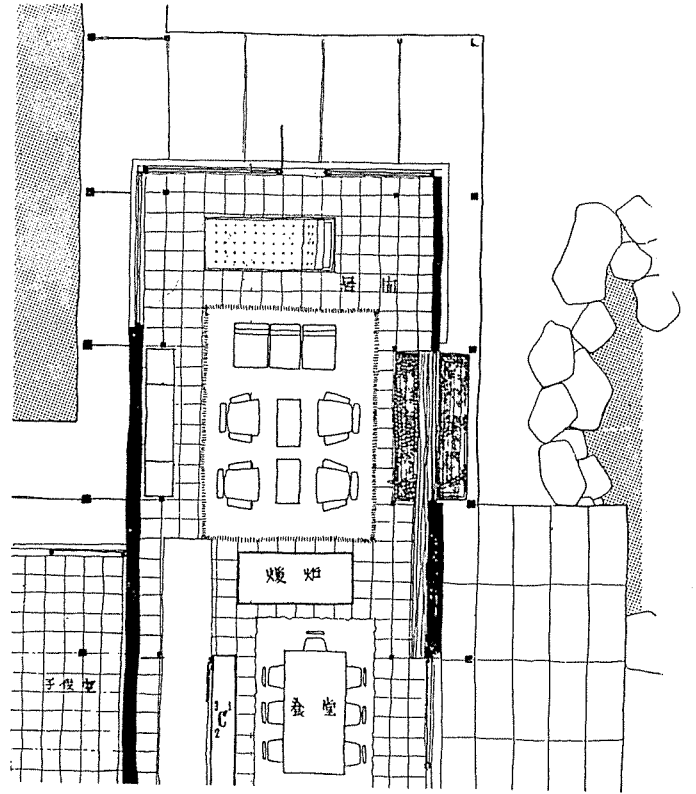
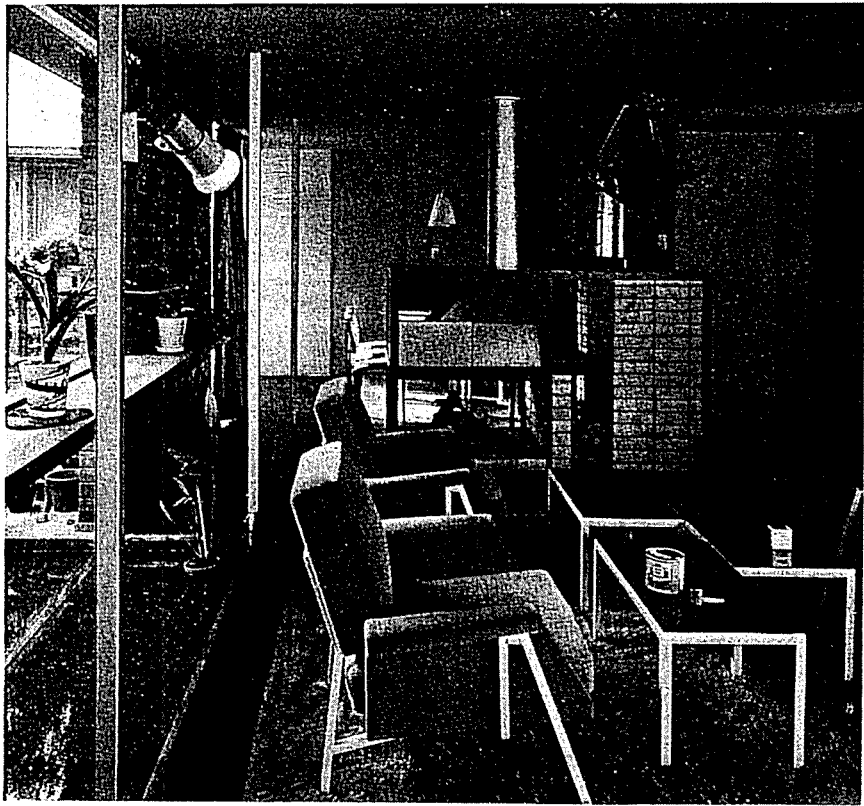
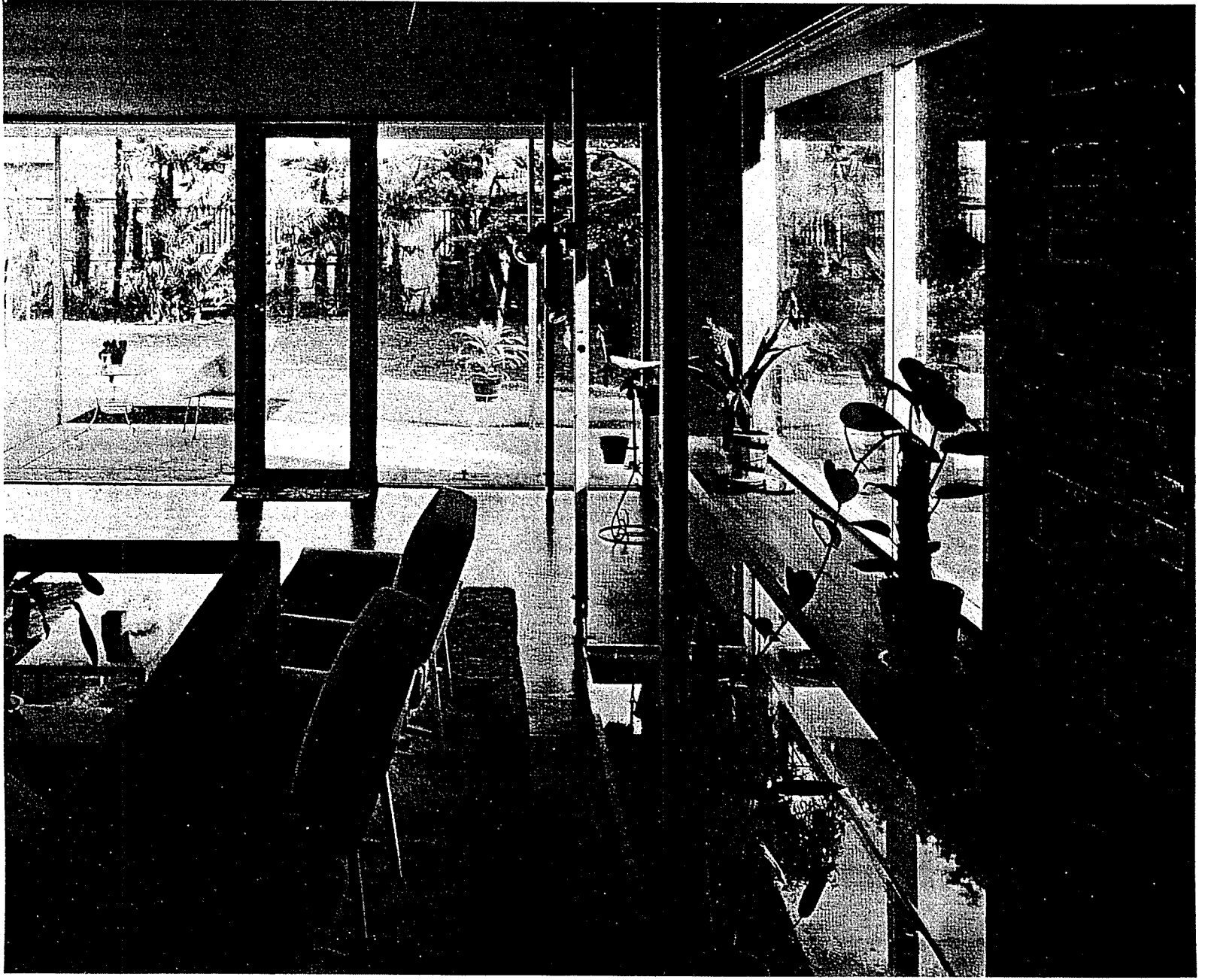
33型と呼んでいる、三鉸接組立形式のラーメン架構の単位部材として製品精度が、主として梁と柱の接合部の加工精度如何にかけられている。そこでこの部分の取合い角度や長さの歪みが、組立て後の架構全体に重大な影響をあたえることはいうまでもない。

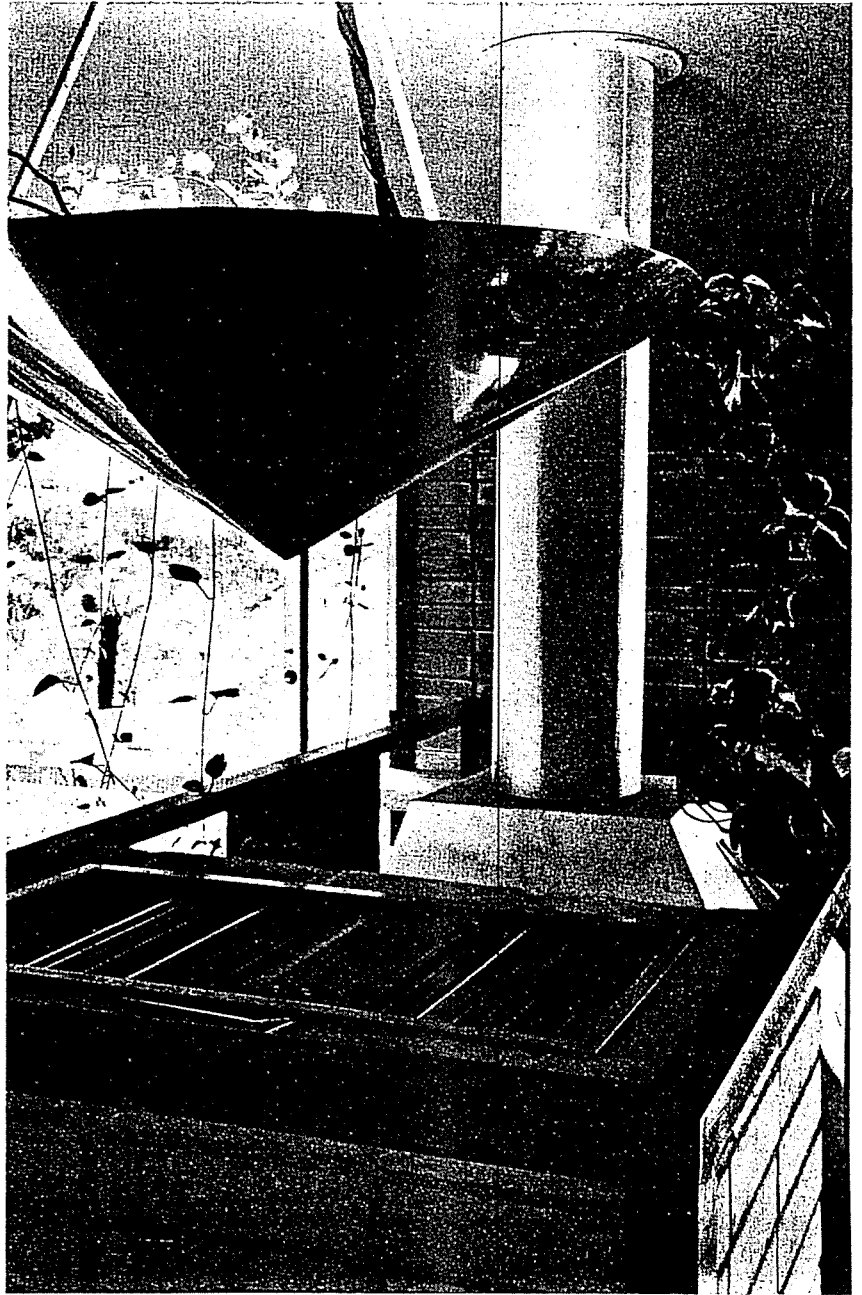
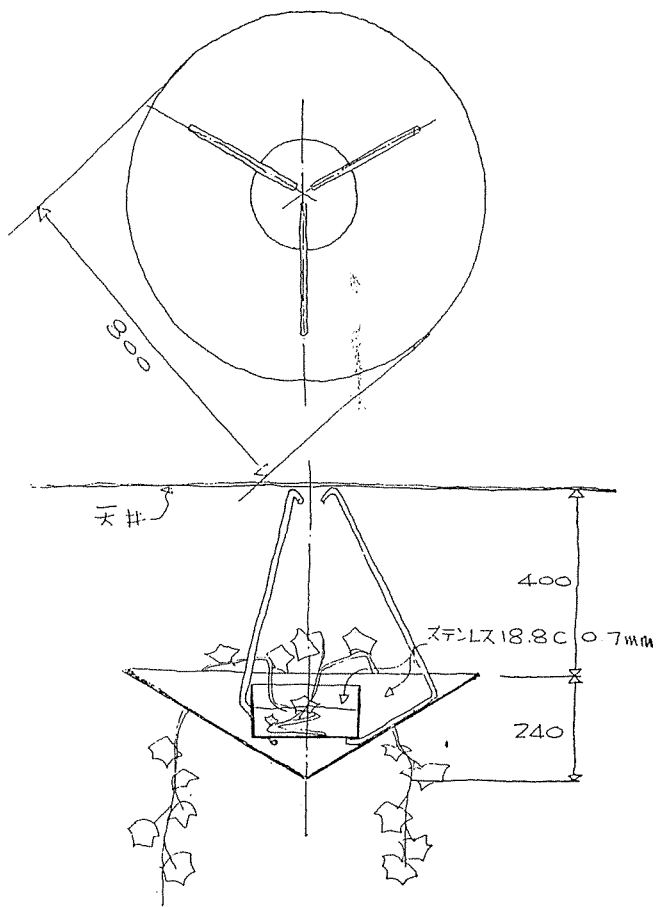
SH-30 はこうした架構の組立て後の精度を主とした、鉄骨構造の精度調査を行った。

調査の結果はきわめて良好であって、大体 1/1000 から 1/1500 (長さに対して) 程度以内に入っていた。1/1000 以内というのは、ドイツ工業規格 (DIN) の GKb/10M 前後と同等程度で、DIN ではこの級の精度を持つものとして、工場生産された規格木製建具の類をあげている。これはこの構造の精度がヨーロッパの技術に比較してもきわめて高いことを示している。しかしこのように高い精度を得るために、基礎の上面およびアンカーボルトの位置、高さについても数回の検査と修正を行っている。アンカーボルトのような点に近い状態のものは比較的精度の確保も容易だが、天井あるいは床のような面についての精度は今後研究の余地がある。

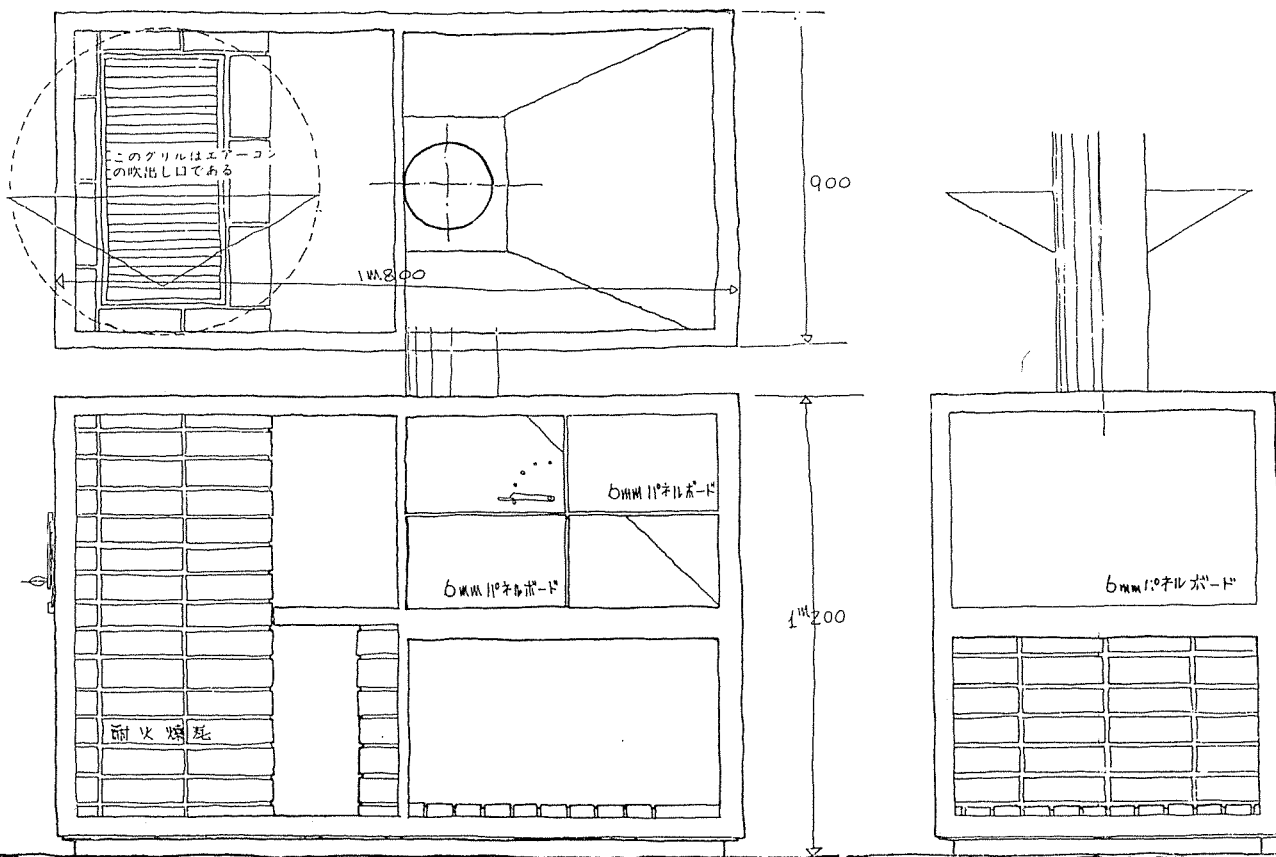
SH-30 の構造と組立精度

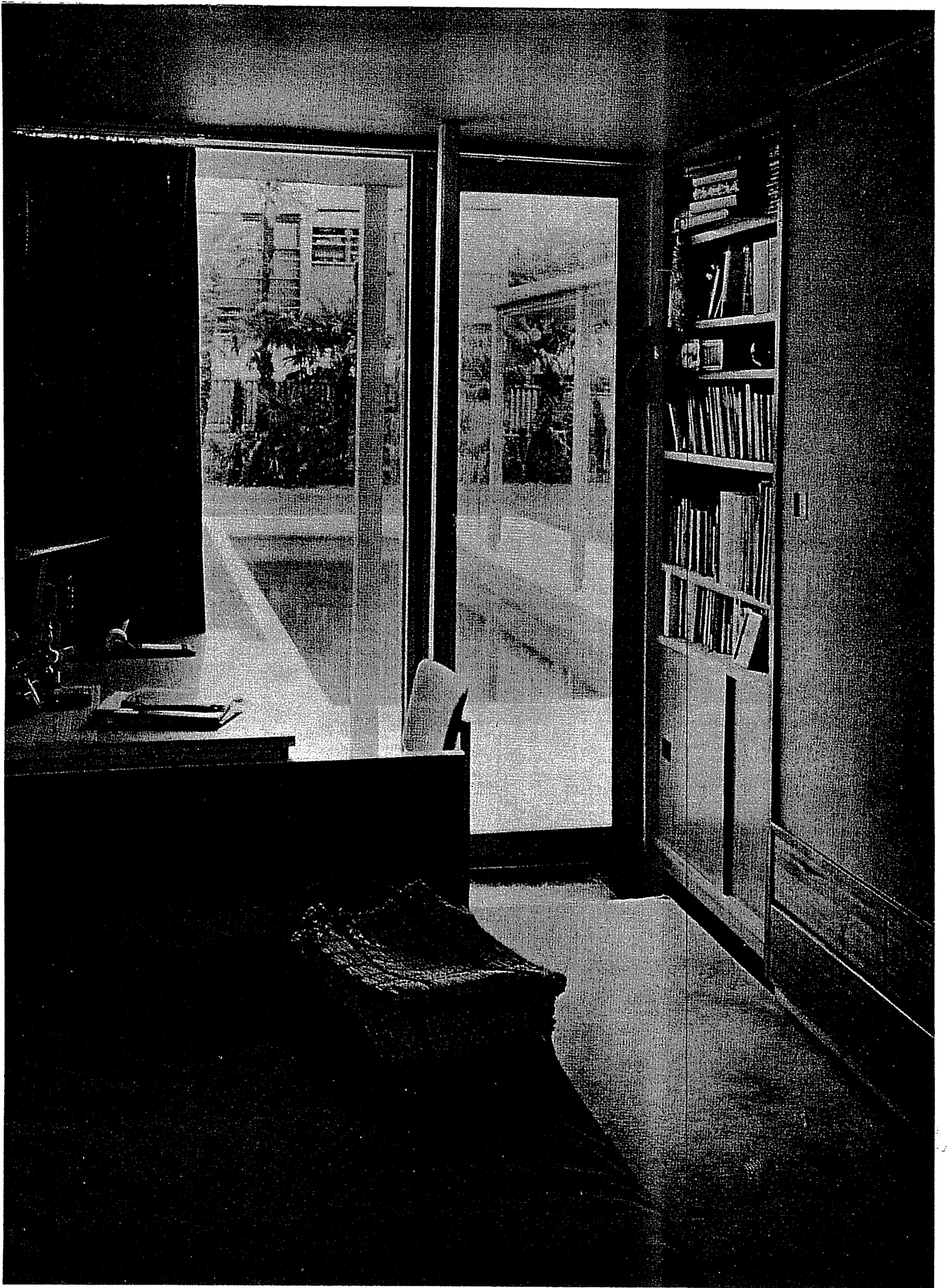


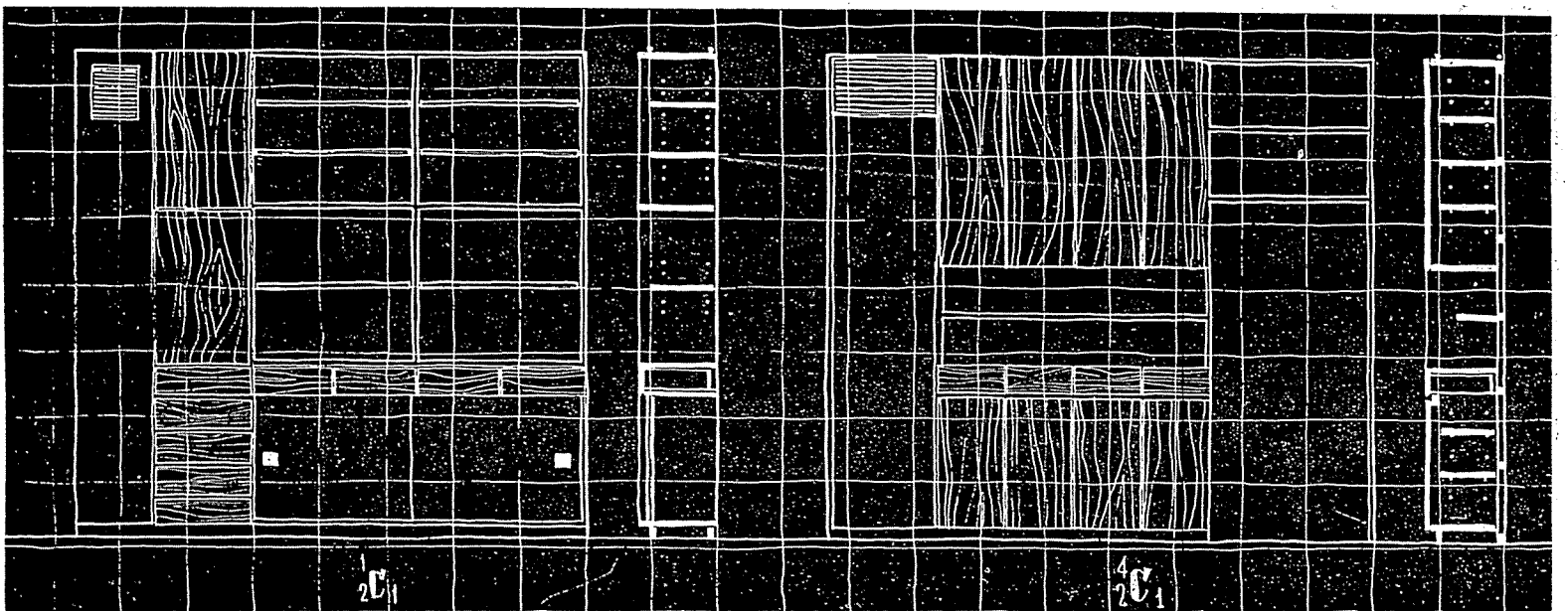
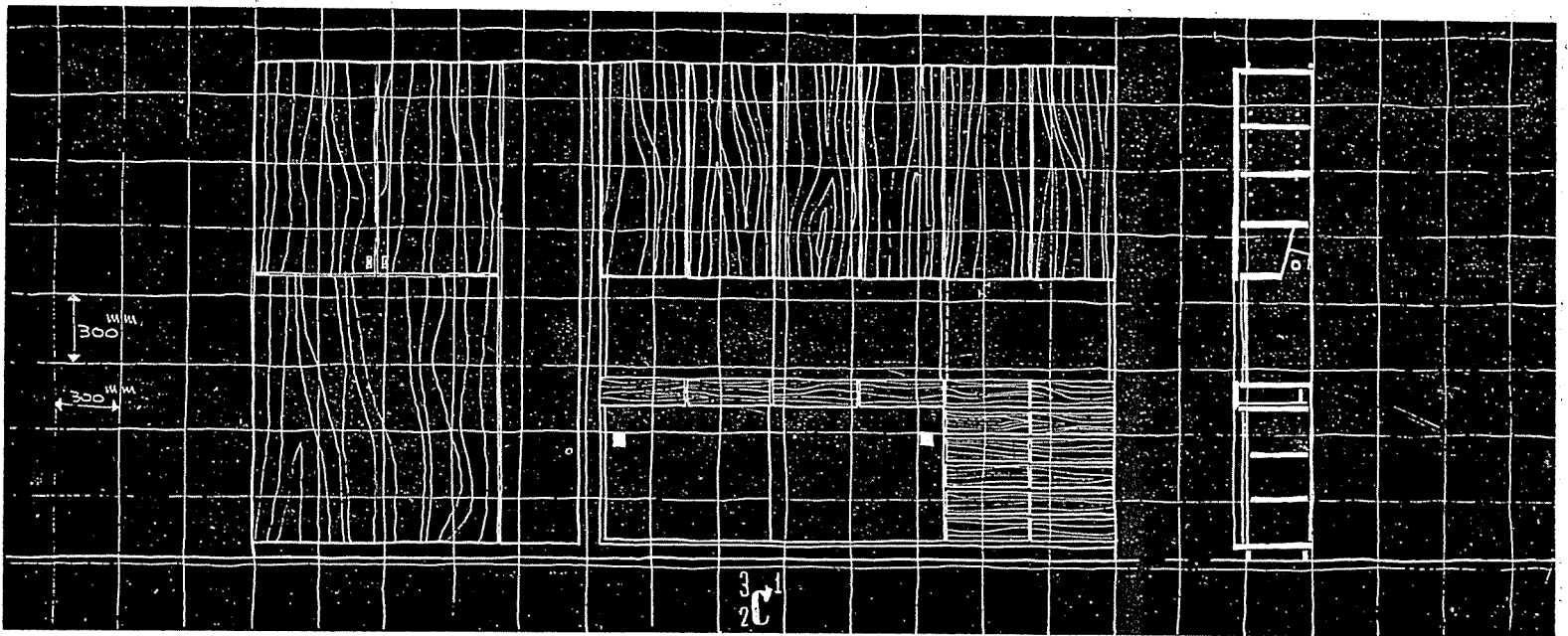




左の頁は暖炉の周辺と居間の写真である。
 この写真で室内から庭に続く連続した空間のありさまがよく分る。
 居間の床と平らなテラス、テラスから庭というつながりや、庭から
 室内に入りこんでくる砂利敷きの池、天井の切れ目までつづく空間
 のつながりなど、居間と食堂の間に置かれた暖炉の位置を含めて、
 広々とした居間の開放された空間は、この住宅の中心として全体の
 性格を集約して表わしている場所でもある。



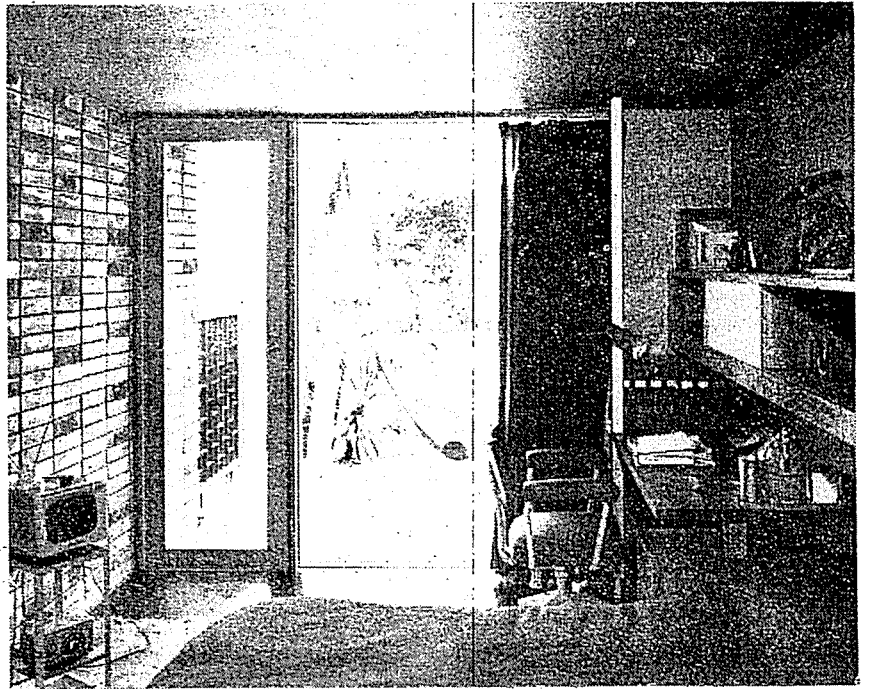
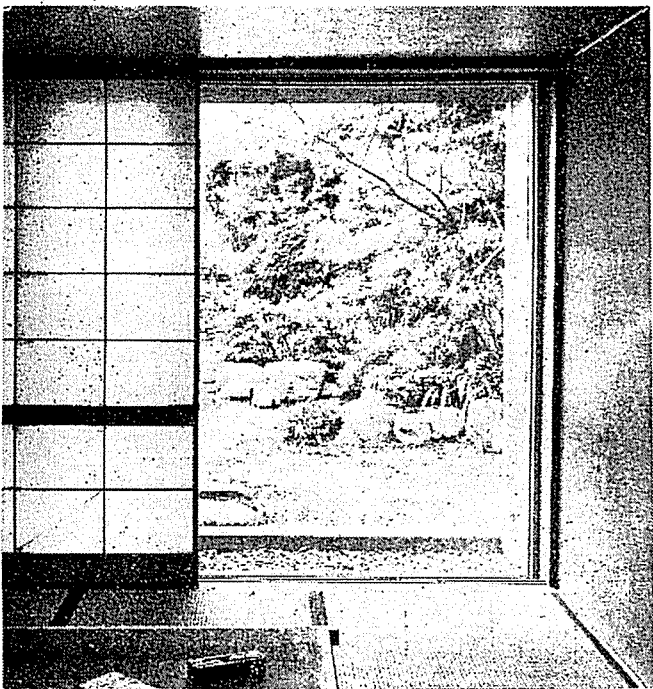


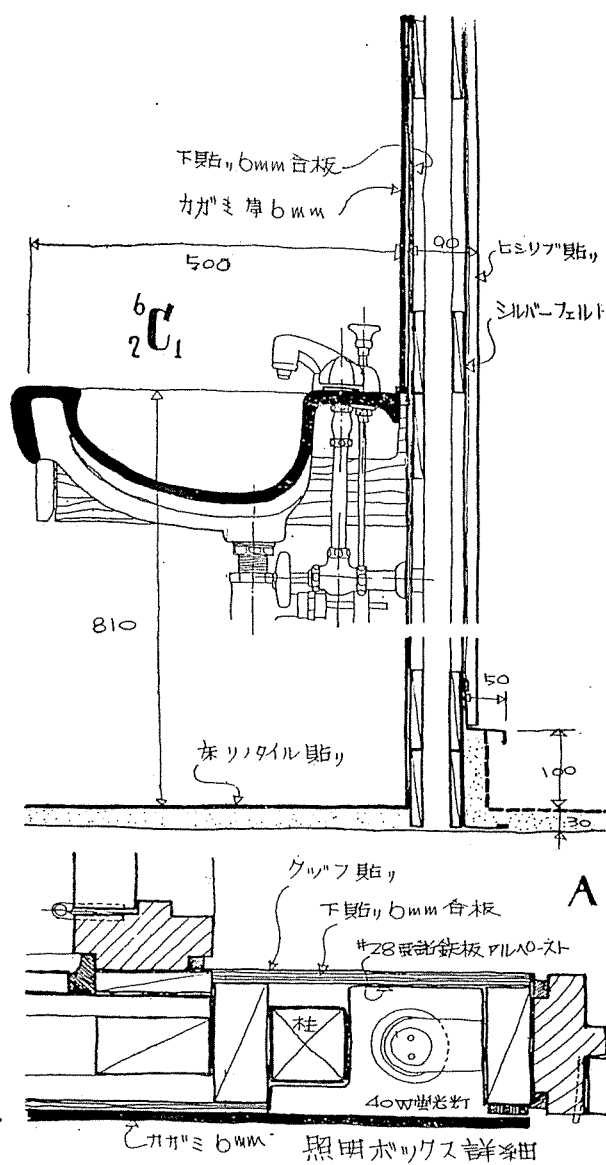
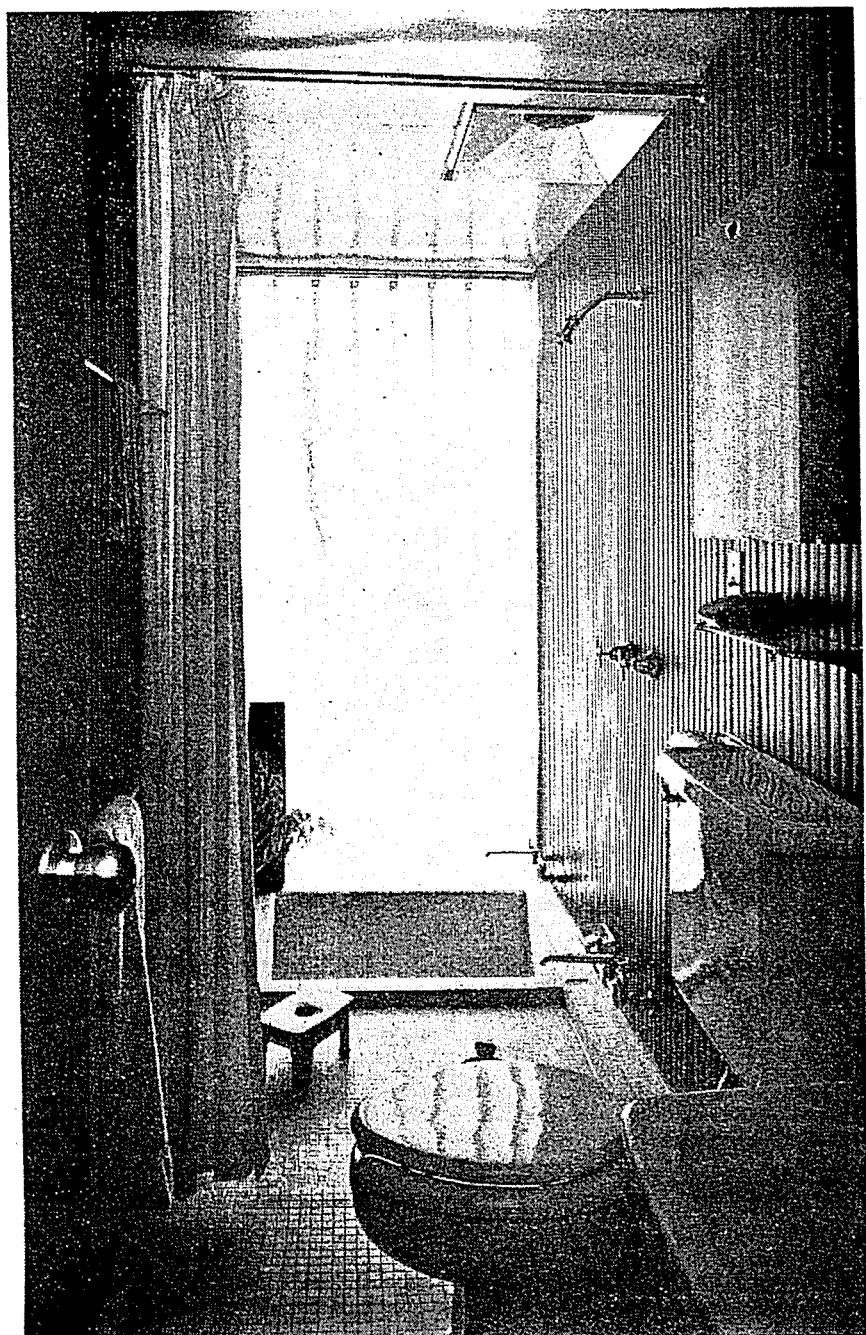


この建物は前述したように、住宅の生産性についての実験的な検討
 ということを主な目的として持っている。

この目的のために、外廻りの開口部と壁の一部に重点が置かれたが、
 その他各室の間仕切りに使われた家具も部品化の対象としてとりあ

げられた。間仕切りは原則としてパネル化され、家具（主として取
 納用）も仕切りとしての役割りを果させるために、天井まで一桁の
 高さのものが使われている。図面も部品化されたものはすべて部品
 図として分けて書かれ、符号によって分類された。





カガミ 6mm 照明ボックス詳細

